

寺島和美作 「霧晴れて」

山口まゆみ(モノローグ)(日記調で)6月になって最初の土曜日。午後は部屋で読書。英語の問題集を6ページやった。マル。

(効果音) (雨の音、バックで)

まゆみ あーあ、夜になったのに、まだ雨やまない。ビショビショと毎日毎日、うっとうしくてイヤだなあ。いい加減アジサイもゲップしてるよ。

ナレーション 山口まゆみは、青春高校2年生。どこにでもいる明るい女の子なのですが、ジメジメと降り続くこの雨には、少し閉口気味。それに、実は心の中も少し湿り気味なのです。というのは、高校に入学したあとに知り合い、付き合い始めた吉田学が、今年の4月に、父の転勤と共に遠く仙台に転校してしまったからなのです。彼と出会ったのはちょうど1年前、やっぱり朝から雨の、ある日の午後でした。

まゆみ(モノローグ) 全くもう、松浦君たち、日直の日に限って休むんだから。本当に風邪だったのかしら。あーあ、すっかり遅くなっちゃった。早く帰ろう。

ナレーション だれもないはずの音楽室の前を通った時、中からピアノの音が聞こえてきたのです。

(音楽) 「主よ、人の望みの喜びよ」(ピアノ曲)

まゆみ あら、この曲、だれが弾いているのかしら。(ハミング)あ！ 痛〜い。

吉田学 君、大丈夫？ どうして…。

まゆみ 痛い。うーん。

学ぶ ケガしなかった？ ビックリしたなあ。一体何が起きたの？

まゆみ (体裁笑い)ピアノ弾いてたの、あなたでしょ。あの曲、バッハの「主よ、人の望みの喜びよ」でしょ？

学 ああ、君、よく知ってるね。

まゆみ うん。実は、わたしクリスチャンでね、あの曲、聖歌隊で何度か歌ったことあるの。わたしも大好きな曲なのよ。

学 え、ほんと？ 偶然だなあ。僕もクリスチャンなんだよ。よろしく。僕、2年E組、吉田学。君は？

まゆみ 2年B組、山口まゆみ。

学 それでね、学校でイヤなことがあったりすると、あの曲を弾いているんだ。そうすると、自然と勇気がわいてくるような気がしてね。

まゆみ ほんと？ わたしもおんなじ。バッハって…。(FO)

ナレーション こんなわけで、まゆみの“立ち聞き”がきっかけで、二人は交際するようになったのです。そんなある日――。

学 僕の夢はね、まゆみちゃん。音大に行って、バッハのようなオルガニストになることなんだよ。音楽を通して、神様に仕える。そんなクリスチャンになりたいんだ。

まゆみ ふうん、吉田君は、本当に神様を中心に考えてるのね。そこへ行くと…。

学 ン？

まゆみ わたしなんか、全然。年ごろになったら、クリスチャンの人と結婚して、クリスチャンホームをつくりたいなあって、それくらいしか…。

ナレーション まゆみは、“音楽を通して神様に仕えていく”という学の姿を、力強く、またうらやましく思いました。そしてふと、そんな彼と共に歩めたら…、とも思ったのです。まゆみは次の日曜日、彼女の入っている聖歌隊のリーダーに相談しました。

まゆみ 先生、もしもよ、音大の音楽科に行くとしたら、今から準備始めたんじゃ遅いかしら。

先生 え？ 何よ、急に。

まゆみ うん。その… 音楽を通して神様に仕えたいなあとって。

先生 へえー、まゆみちゃんがそんなこと考えてるなんて知らなかった。そうねえ、今からでも間に合わないことはないけど、でも見た目よりずっと大変なことよ、音楽って。でも“神様のために”っていう信念があれば、決して遅すぎるってことはないと思うわ。

まゆみ ほんと?! ありがとう。

ナレーション うれしくなったまゆみの心には、学と二人で、音楽を通して神様に仕えていく、という夢が果てしなく広がっていくのでした。これを知った学ももちろん喜び、二人の未来はピツタリーつになったはずだったのですが…。年が明けて、今年の2月になったばかりのある寒い日――。

学 まゆみちゃん。僕… 転校しなきゃならなくなったんだ。

まゆみ え、どうして？

学 父が仙台の支店に転勤するから。家族で引っ越すんだ。ごめん。

まゆみ ううん。あなたが悪いわけじゃないもの。でも、そしたらどうなるの、わたしたち？

学 悪いけど、一度ここで“さよなら”をして、別の道を歩いてみようよ。もしかしたら、「今までスムーズにいろんなこと行きすぎちゃったから、少し考える時が必要だ」って神様が思ったのかも。

まゆみ そんな…。どうして神様ってそんなことするの？

学 何年かして、また会ったときには、きっと新しい計画が見えてくるよ。それまで、お互いに自分を磨いておこうよ。

まゆみ (泣き出しそうに)うん。

(音楽) (悲しみ)
ナレーション その時、まゆみは心の中で、あのバラ色の夢がガラガラ音を立てて崩れていくのを感じていました。こうして仕方なく別れてしまったものの、心の中にポツカリ穴が開いたような数か月が過ぎ、もう6月。この雨の季節は、まゆみを余計湿っぽくさせるのです。

先生 再来週から三者面談に入るから、ご家族の方に都合をお聞きしておくように。

(効果音) (教室のガヤ)

友子 あーあ、三者面談なんて。まだ将来のことなんて分かんないよ。その点、まゆみは、いいわよね、もう決まってて。音楽を通して、吉田君と二人、神様に仕えていく… だもんね。夢があっというわねえ。

まゆみ そんなことないわよ。学君、仙台に行っちゃったし、最近あまり手紙も来てないし、自然消滅かな…。

友子 そうか…。お互い、それぞれ忙しいもんね。

まゆみ なんか、音大への道も、今じゃ少し気が抜けたような感じだわ。

まゆみ(モノローグ) そうなのよね。付き合い始めたころは、コースがはっきり決まっていた、なんの心配もなかったんだけど、学君が仙台に行って、計画が狂い始めて、今じゃデベドボ。音大っていうのも、どうでもよくなってるような感じ。

友子 まゆみ、どうしたのよ。急に黙っちゃって。それはそうと、来週の火曜日、開校記念日で休みでしょ。それで、お父さんがね、月曜の夜から山中湖へ1泊のドライブに連れてってくれるのよ。まゆみも一緒に行かない？

まゆみ ドライブ…。そうねえ、でも、きっとまた雨よ。

友子 その時は、その時。トランプでもしてればいいじゃない。父は釣りがしたくて行くんだから、雨でもいいのよ。

まゆみ うん。じゃ、行こうかな。

ナレーション 誘われるままに、ドライブに来たまゆみでしたが、心の中はどうも晴れないのでした。バンガローに着いた二人は――。

友子 あーあ、やっぱり雨だったわね。

まゆみ うん、梅雨だからね。

友子 お父さんたら、娘をほっぽりだしてさっさと自分は合羽を着て夜釣りに行っちゃうんだから。もう！

まゆみ しょうがないわよ。それが目的なんだから。少し早いけど寝ちゃおうか。もしかしたら、明日は晴れるかもよ。そしたら早く起きて湖の近くまで行ってみようよ。

友子 うん。そうしようか。

(効果音) (雨の音)

まゆみ(モノローグ) 雨の音、聞こえる。ポン、ポン、イヤだなあ。雨なんて大嫌い。ジメジメしてて。カラッとさわやかに晴れないかしら。本当に心の中までスキっとするような、晴

れた日にならないかなあ。

ナレーション　そして一夜が明けて――。

(効果音)　(小鳥のさえずり)

まゆみ　(あくび)もう朝なのかしら。あら、雨、少し上がったみたい。よし、早朝散歩に。

友子　友、起きて。雨が上がったみたいよ。

友子　うーん、またどうせ降り出すよ。あたし、眠たくて。行きたくないよ。まゆみ、独りで行って。

まゆみ　全くもう。じゃあ独りで行っちゃうぞ。

ナレーション　こうしてまゆみは、一人で湖のほうまで歩いていきました。

まゆみ(モノローグ)わあー、すごい霧。先が全然見えない。でも、しっとりとしていい気分。あーあ、学君が隣にいたら、最高なんだけどなあ。さてと、友子もそろそろ起きたかしら。こっちの道でもよかったのかな。…あれ、違う。あれ、霧で見えない。どうしよう、道に迷っちゃった。神様…。キヤー、出た！

友子の父　え？ あ、なんだ、まゆみちゃんじゃないか。

まゆみ　あ、おじさん。よかったあ！ 散歩に来て、霧で道に迷っちゃったの。

友子の父　なあんだ。霧の中から「キヤー」なんて聞こえたから、こっちがビックリしたよ。

まゆみ　ごめんなさい。でもよかった。帰れなくなったらどうしようかと思っちゃった。

友子の父　(笑い)そうか。でもよくあるんだよ、山道で霧が出て道に迷って遭難なんてことが。そういうときは、霧が晴れるまで待ってればいいんだけど、みんなむやみに動いて、今度は本当に迷い込んでしまうんだ。

まゆみ　へえー、霧って怖いんですね。

友子の父　ああ。でも霧が晴れたあとは、空気がとってもきれいだし、木々の葉も、なんて言うのかな、潤ってるって感じで、とてもすがすがしいんだよ。

まゆみ　ふーん。あら、少し晴れてきた。

友子の父　うん。今日はいい天気になりそうだ。

まゆみ　あれ、もしかしたら、あそこ、わたしたちがと待った所…？

友子の父　そうだよ。

まゆみ　あんなに近かったんだ。(モノローグ)そうか。もしかしたら学君のことも、彼がすぐそばにいた時は、道は確かに見えてた。でもそれは、まるで蜃気楼しんきろうみたいな、勝手にわたしが作り出した道だったのかもしれない。学君と別れてしまった今は、霧の中にいるような、一歩先は何も見えなくて、とっても不安だけど、でも、この霧が晴れたとき、道がはっきり見えてくるんだわ。

ナレーション　まゆみは、「その霧の中で、イエス様にしっかりついていけばいいんだ」と、自分に言い聞かせるように、深々と朝の大気を吸い込んだのでした――。

<完>